

世親の無表業の解釈をめぐって

工藤 道由

業思想の中でも無表業の思想は重要な位置を占めている事は周知のことであろう。その思想は特に俱舍論を通じて知ることが出来、又夙に無表業が未来に果報を招くまで相続するかどうか論争が行われて来ている。ところで、無表は法処所攝の色法であるとされるので、その相は無表色 (avijñapti-rūpa) として俱舍論界品中に論じられている。そこで、本稿では界品第十一偈を取り上げ、その内容を究明することによって無表業理解の一助とし、更にこの偈をめぐっての衆賢、称友等の論師の論争を通じて世親と衆賢の無表に対する根柢的な思想背景をも指適してみたい。

一 世親の解釈

vikṣipācittakasyāpi yo'nubandhaḥ śubhāśubhaḥ |

mahābhūtanūpādāya sa hyavijñaptirucyate || (AKBh. p. 81-11)

（乱心の者にも無心の者にも亦、随流する淨又は不淨である大種所造のもの。それが即ち無表と言われる。）

（以下長行釈）①乱心の者にもとはそれと異なる心の者にもである。②無心の者にも亦とは無想定と滅尽定の者にも亦である。③api という語によって不乱心者と乱心者も（含意していることが）知られる。④随流とは相続 (pravāha) である。⑤ucyate とは acārya

の言葉であることを示す。⑥要するに表（業）と定とによって生じた善不善の色が無表である。

二 衆賢の反駁

右の世親の無表色理解に対して衆賢は六失があるとし、次の反論を展開する。反駁其(1) *vikṣipācittakasyāpi* ということによって他の一切の有心位を攝しているから、他にどんな位もなく、api の語は無用であり余計である。同(2)随流 (anubandha) とは相続 (pravāha) であるとするが、初刹那は相続に入らず大きな過失である。(3)相続は仮 (ādṛavya) であるから論に反する。(4)無表色に対して無対色であるとして区別せらるべきものが区別されていない。(5)定所発（の無表）は（随心転であるから入定中にのみ存し）乱心無心には随流しない。従って無表ではないから不足である。(6)無心（定）に関しては善の無表の随流（のみ）であることが区別せらるべきなのに区別されていない。(V. AKV. p. 30 1. 22-23)

以上の過誤を離れんが為に衆賢は俱舍論本頌の改頌を敢えて行なっている。

kṛte'pi visabhāge'pi cīte cittāyaye ca yat |

vyākṛtprāptighaṇ rūpaṃ sā hy avijñaptir iṣyate || (AKV. p. 33 1. 21-22) (Tattvartha 219-4-1~2)

（作等と不同類心等と、そして心の無くなっているのと有記と無対の色。実にそれが無表と主張される。）（改頌の検討は省略）

三 称友の衆賢に対する批判

称友は俱舍論本頌の註釈の次に衆賢の世親に対する反駁を引用し

つつ逆に衆賢への再反論を試みている。その批判を衆賢が論難していた六点に対応させて考究する。称友の衆賢批判(1) *api* の語によつて乱心者と無心者の(他に)第三者となる不乱心者という別法が区別されるのである。同(2)相統とは多刹那中に於いて相統と称せられるのであるから(多刹那中の一刹那である)初刹那是相統である。(3)相統は実(*dravya*)である。(4)無対であるということは後に示される。(5)しかし不乱心者と有心者の相統(*samtana*)にはまさに随流する。(衆賢再難: そうであるならば浄・不浄の表業は無表の相があることになつてしまふではないか。)(称友再答)表は無記でもあり、更に表は無表の様に強力に随流はせず、無表が減していない場合でも表の減は現われるからである。(6)衆賢の無表の相(改頌)に於いても浄の無表の随流が無心に関して区別せられていないではないか。

四 問題 点

これらの論争は、A—相統について、B—定所生の無表についての二点に要約することができる。(今回は相統についてのみ考察する。)

A この言う相統の原語は *pravāha* であり *samtana* ではない。*pravāha* は心不相応行法の生住異滅の四相を論ずる際に、次の様に述べられている。

pravāhasādrupādo nivṛtтивayah. sa eva pravāho'nuvartamānaḥ sthitiḥ. (AKBh. p. 77)

(*pravāha* の初めが生である。止滅するのが滅である。同じその *pravāha* の現に就いて起こりつつあるのが住である。)

世親の無表業の解釈をめぐって(工 藤)

これに従つて解釈するならば、世親は *pravāha* は初まりを有し、終わりを有する有限的時間的連続であると規定していたと言ひ得よう。

一方、衆賢はこの世親の解釈に対して辛辣な批判を加え、衆賢自身の規定を述べる。

諸行相統名何所詮。謂諸有為無間流転。此復何法為其自性。是假有法。寧求自性。然諸刹那、展転相似、因果相繼、諸行感赴、連環無斷。說名相統。若爾相統說有_二生_一、不_レ應_二正理_一、非_二俱起_一故。(T 29 407c)

これに従えば、衆賢の説く相統とは刹那是有しない無限的時間の連続であつたといふことができる。これは、

一刹那法、獨_レ為_二相統_一、假_レ法所依、不_レ應_二正理_一故。(T 29 407c)

と述べ、一刹那が独自に存在することへの不信を表明している点からも、衆賢の説く相統とは刹那を有しないものであつたと言ひ得る。従つて、世親の説く相統は、

然依_二多法_一、總_レ立_二為_一。一。(T 29 407c)

即ち、全体の中に個々独立の部分を独存させているが故に、假法に過ぎないのである。

かくて世親と衆賢の相統(*pravāha*)に対する規定の思想的背景は明らかになつたと思う。この様な相違が根本的な無表に対する契機となつているのである。(定所発の無表については稿を新たにしたい。)(註省略)

(駒沢大学大学院)